

西朋

都立西高山岳部OB会

1958 . NOV.

15

西朋登高会

現役指導を再認識する

田 中 將 利

前号で林武志が断層への憂慮を訴えた。僕の世代の切目を憂える。我々の会は高校山岳部に直結しているだけに切実に思うのだ。高校山岳部は今改めて述べるまでもなく登山に共通する基本力の養成に全力を挙げるべきであって、ハイキングやワンダーフォーゲルのクラブであっても、又先鋭的クライマーの集団であつてもならないのである。基本力の養成練習は、考えようによっては非常に単調であると思われるかも知れない。面白味の少ない山行と彼らは考えられるかも知れない。又指導するOBにとつても労多くして功少しであるかも知れない。場合によっては、教師や父兄にこの基本訓練が、先鋭的登山の強制と混同され、同一視される場合すら多々ある。現在に於いてはこれら以外の何ものでもないと思つてゐる人もあろう。しかし、我々が一步後退して、ワングルの山登りや、無智にも等しい彼らの、急欲的、な山登りを許すとしたら、又山登りに全くの素人とも云いる教師（節庁の方針）に指導の凡てを肩代つたならば……首を縦に振れる仲間が居るだろうか。

我々も至願している通り、彼等の年令に於ける肉体と精神は、未だ不充実であり、その成長の度合も個々の間に、かなりの差違を見出すことが出来る。彼らは人生へ激しい意欲を持って居る杯にも見えるが、情熱と云うよりは、むしろ多感として見た方が良いであらう。情熱と云うにはあまりにも肉体的、精神的に弱いからである。

我々の会に与えられている使命は、我々の登攀を意欲的に前進せしめると同時に、この多感にして扱いにくい後輩を山で死なぬ杯に正しくリードしてやることにある。野放しにせず、そして精りつけもせず、それでいて学校内でも胸を張ってスポーツマンとして成長する杯に、手綱をとらねばならない。それには常に彼等一人一人の成長を見、そして彼等の良き相談相手である必要がある。彼等を成長させる強弱の手綱を取る者は、我々以外の誰でもない。

然し今の我々を顧る時、会の主力メンバーと現役との間に立つべき世代の貧しさを認めることが出来る。質と量に於いて、林が叫ぶ杯に現実には然りなのだ。未年は一層断層の切れ目か喰い違つて来る。現役の中で最も世代の近い弟ですら、僕とは年令的に八年の差があり、部の運営に關しての感覚的差違をしばしば感ずるのだから未年度の部の中心となる現在の一年部長との、この差はまだ開くと思つてよいであらう。彼等の良い相談相手となるべき近い世代を質量ともに育てることが肝要である。これら一連の問題は、今新たに波紋を投げたのではなく、六年程前に逆のぼりはするが、論じて成し得なかつたのは我々の重大なる怠慢であると同時に、取返しつかぬ錯誤なのだ。未年度、この錯誤を更に大とするか、この断層をいくらかでも埋め得るか、我々に課せらせていることを再認識する要に迫られている。今冬の登攀と、都会での「断層線」への指導に全ての注意が運つてゐるのである。

参加者：田中將利、田中実、福田宏二郎

四月二〇日（晴）

富士見（五、四〇〇六、一〇〇）―立沢公園（六、三五〇）―朝食（七、二〇〇七、五五〇）―広河原出合（八、五〇〇）―狼火場出合（一〇、三〇〇一〇、五〇〇）―昼食（一一、一五〇一二、四五〇）―壁下引返（一二、三五〇一三、一〇〇）―立沢（一六、四〇〇一七、〇〇〇）

登山ブームだと云うのに行き交う人もなく久々の山行も、この上なく楽しい。予期して居た雪は広河原沢を過ぎると現れた。樹々は昨日までの新雪の爲か厚く雪化粧している。兩岸が迫る頃、水流は雪の下に影をひそめた。青氷に、そして濃藍の空に冬山の錯覚を呼ぶ。

南稜から望むとき、狼火場沢の奥にすっきりした岩があるのではないかと云う莫然とした望みを頼りに飛び込んで見たもの、狼火場沢出合ですでに一〇時を大分廻っていた。岩小舎は巨大な氷柱と節厚い青氷で生活できそうにもない。狼火場沢に入ると雪面は春陽を遠慮なく返してキラキラと燃え立ち、ラッセルは必然的に重い。沢が左に廻りゴルジュを形成すると二股となり左股は二〇mもあろうかと思われるアイスフォールをその奥に乗っている。勿論右が本流である、奥壁を期待していた我々ではあるが、重いラッセルの連続と周囲の森林からそ

の存在をあまりめづらぬ左岸の岩棚で昼食を攝り、空身で右股に入る。ラッセルは深く重い。二、三の急なルンゼのテマリを越すと沢は九〇度左折した。兩岸は迫って赤茶けたゴルジュとなり正面に高々と岩壁が現れた。このゴルジュは二〇〇mもあろうか。これが切れると沢は正面の岩壁を取りまく林に広く分散された。我々は正面の広大な雪面を登った。陽は高く暑い。正面は彗星と謂われる峯かと思われるが右半面に約二五〇、二〇〇mのスラウ状の直壁を持ち、その右端に極端なM岩峰を有している。その上で傾斜は落ち追松をまじえた露岩帯となり、頂上まで約三〇〇mの高差があると思われる。叔現沢正面や広河原のそれとは比ぶべくもないが、登攀の対象としては右半面に喰い込む数本のクラックは面白そうだ。時向的にも又、ザイルを昼食地点に残して来た我々には、壁下のバンドから引返さざると得なかった。生きも、林に、ころがるスノーボールと競争しながら、ラッセルの跡を下る。スケールこそ小さいが期待した展開に今日の幸を得て、何となく楽しかった。久し振りの鳥か心地よい疲労感と睡魔を意識しつつ、広河原の出合近くから立湯川左岸の小路に入る。広河原の奥壁が落陽を浴びてタイナミックに森林を圧して居た。ハヶ岳もいい山だなと、ほくそ笑みながら複雑怪奇な面岳裾野の森林に飛び込んで行った。

（田中將利）

70 立場川周辺

係・町田 明

期日・四月二十九日〜五月五日

参加者・町田 明、田中実、林 武志、福田宏二郎、岡谷 徹、

松田朝夫、米野弘躬、林 春彦、飯塚康史、中山 博

我々はすでに広河原沢奥壁ニルンゼ及び三ルンゼには再三入っているが、立場川本谷流域及び広河原沢奥壁ニルンゼはまだ未知の地域に等しい。今回この立場川流域で合宿を行ったのは、立場川本谷及びその流域の各沢をトレースし、更に広河原沢奥壁ニルンゼの偵察を行いたかったからである。狼火場沢奥壁及び広河原沢ニルンゼの偵察が十分に行われなかったのは残念であったが、一〇を数えるパーティーを行動させることが出来たのは成果であった。以下は各隊の記録である

四月二十九日 (晴)

岡谷 徹、林 春彦、

立沢公園(六、四五)―朝食(六、五〇)七、四五)―広河原沢出合(九、四五)一〇、二〇)―昼食(一一、一五)一二、三〇)―引返し点(二、〇〇)三、三〇)―広河原沢出合(四、〇〇)

富士見から公園までバス、五分ほど歩いて体が温くなったところで朝食、荷の整理。広河原沢出合でテントその他をデポ、立場本流が鋭く左曲した所で昼食。しばらくで幅広い道は終り代株小屋だ。いよいよ

よ河原歩きとなり山も香たなあと当然のことにおどろく。と共に正月の後立、三月の広河原沢、北岳パットレスとは何か違った喜びに気がつき、高校時代の山行をおもいだしたりする。

当初の残雪豊富という予想はくつがえされ、水量のはなはだ多いことに気づく。狼火場沢出合手前のゴルジュで行きつまる。ちよぼちよぼある残雪は乗りついてたたと丸林さんの左手がしびれていないとしても高まきまにけることはかなり悪そう。水の中をずぶぬれで歩くのも考えものだ。林さんの荷でしびれて自由のきかなくなった左手と、水量の杯子をみて明後日にでもまた立場本流をやろうということになり引き返すことにする。明日は南稜と決め月を見ながら夜食。

四月三十日 (晴)

南稜 岡谷 徹、林 春彦、

広河原沢出合(五、五〇)―南稜取付(六、〇五)―無名峯(朝食(九、一〇)九、四〇)―阿彌陀(昼食(一一、三〇)一二、二〇)―ハツ手からのトラック道(三、二〇)三、二五)

テントを出て立場川ぞいに一〇分ほど歩き道が右岸に移ったところから南稜めがけて登る。稜線には道があり先ず安心。南稜から見るとマタキ沢は出合が悪そうだがあとは雪深歩きで登れそう。広河原側ではクロテスクに残雪を付けた滝をもつニルンゼが目をおひく。無名峯をすぎると立場山からつゞいていた残雪もなくなり右左とキヨロキヨロしながら歩いているうちにP₃につく。左にまわりクツジを登る。林さ

んはザイルにつかまりながら右手だけで強引に登ってくる。御小屋尾根は下りすまてしまひ大失策。すそ野の大トラパスでやっと立揚川への道に出る。林さんは広河原出合へ、関谷は東京へと別れる。

(関谷 徹)

五月一日

林 武志、林 香彦

BC(一、三、三五)―狼火場沢出合(一三、〇〇〜一三、二五)―

BC(一四、四五)

林(武)が遅れてBCに到着したので予定の狼火場沢を中止し出合迄とする。昨夜の雨で増水し徒歩に苦勞する。雪はほとんどなく狼火場沢出合附近から現れてきた。出合手前から左岸を大きく捲き出合に降りる。岩小屋をのぞいてから帰途につく。

明日にそなえて早々に夕食の支度をする。久しぶりの飯盒炊さんに山に登り出した頃の事を思い出し飯が一段と美味い。(林 武志)

五月二日

ガマタキ沢 林 武志、林 香彦

BC(六、二〇)―狼火場沢出合(七、四〇)―ガマタキ沢出合(九、四〇)―一〇、一〇)―縦走路(一三、五〇)―一四、二五)―キレット(一五、一五)―赤岳、中岳分岐(一六、一〇)―中岳(一六、三〇)―阿弥陀岳(一七、〇〇)―一七、一五)―不動清水(一七、五

五)―BC(一九、〇〇)

今日は予定通りガマタキ沢へ向う。水量は昨日より五割余減少している。昨日よりも祭に行ける。狼火場沢出合迄昨日と同じ林に行く。

岩小屋すぐ上の滝は水量が多いので膝まで水に入って右手の倒木を登る。沢は右に曲り向もなく上に小屋跡のある滝に出る。これは左岸を捲く。沢は開け左に曲る。雪は両側にわずかずつ続いている。右岸に草の台地を見て倒木と残雪を踏み、浅いゴルジュに入る。水が多く流れを瘦ることが仲間難しい。これを過ぎると正面右手に滝が現われる。これがガマタキ沢出合である。本流は大きく左へ曲る。食事を済して滝の左岸の急な森林帯へ取付く。出合の滝から連続する二つの滝の上へ出る。沢は八分通り雪にうまっている。しかし時々もぐろの注意を要する。二ヵ位のアイスフォールに出る。充分ステップを切って東越す。やがて正面に水量は少いが二〇ヵ位の滝が落ちてくる。更にもう一段ある。本流は左に曲り暗く二〇ヵ位の滝がある。左岸の不安定な草付を登り更に森林帯に入って水平に捲き沢へ下りる。沢は完全に雪に埋りしかももぐることなく快適に歩ける。沢は二股になりこれを右に行く。傾斜はやっときつくなる。赤い岩肌が現れこれを過ぎると急流は大きく拡がりカール状になる。正面に三〇ヵ位のアイスフォールが見える。我々は時間がないので左手の一番低い部分に向って登る。雪とカレに続いて這松こぎでいささかバテル。縦走路に出て二回目の食事をとる。さすがに縦走路は人が多い。西風が強く帽子がとばされそうになる。縦走路にも葉外雪が残っている。なかはかけ足

でキレットを通過し赤岳への登りにかゝる。さすが八ヶ岳の主峯だけに登りである。中岳への下りも膝が笑い出す。中岳を越えて阿弥陀とのコルにつくと、そのまたなさにおどろく。雪の上一面に紙屑と空岳でいっぱいだ。阿弥陀頂上へは割合案につく、眺望もそこそこ、御小舎尾根を下る。西向きで上部は遺松と岩なので凡当りが強くつらい。BCへの降り口を見当つけながら下る。森林帯に入り更にガタガタ下り膝が笑い出す頃唯一の水場不動清水へつく。これからはやゝ平となり右側にバツサイの跡を見て展望のよいピークを越え、更に左側にバツサイしたところが現れると道は二分しいずれも饗場行であるが、左へ行き更に広河原沢の飯場へ向って下りる尾根をめぐって道からはずれ下りる。尾根の途中に小屋跡がありこの少し上部から下は径がある。BCに着くと向もなく杖現岳附近から月が出た。今日の強行軍の疲れを忘れさせてくれる。

(林 武 志)

五月三日

中央稜 林 武志、林 春彦

BC(七、一〇)ーゴルジュ(八、三〇)ー御小舎尾根(一一、一五)ー不動清水(一二、四五)ー三、三〇)ー広河原へ下降点(一四、〇〇)ーBC(一四、三〇)

昨日は寝るのが遅かったのでいささか眠い。

広河原沢左股に入る。ハッキリした径はゴルジュの入口で切れている。その入口に五爪の滝があり、右岸の草つきバンドを大きく捲けば

アマガイレンで滝上に出られるが、更に二〇mのナメー〇mの滝と幾き、林(春)の腕が不自由であることも考え、左岸のガレを登って稜線へ出ることにする。ガレの終りから森林帯へ入り苔でフワフワした急傾斜を登る。稜線には立派な径がある。中央稜末端にあった踏跡に続くらしい。全くの森林帯で周囲の状況はよくわからない。登ると稜線は非常に崩せ左に滝がわずか見えてくる。再び稜線は広くなり雪が少し現れ径を失う。しかし少し登ると再び広い急な径に出る。日向を見つけて昼食にする。急な径がなくなり踏跡を真直ぐ登ると下の岩場へ出る。高さ五〇m位であろう。左の方は二階になり木が多い。右の方は木はあまりなく下部は悪そう。岩の下端を右に捲いて行く。木に掴まって登る部分もあるので林(春)は非常に苦勞する。岩の裏へ出ると再び森林帯でやゝ登ると上の岩場である。高さ約四〇m割合堅うで右のリツチは面白そうである。我々は下部を左に捲いて岩の裏側の遺松帯に入る。これからは左側が遺松、右側がガレの稜線を登る。凡は相変らず強い。御小舎尾根を登る途中が意外に大きく見える。一ルンゼ上部を偵察しつつ、長い遺松こきを終り御小舎尾根に飛び出す。直ちに御小舎尾根を下降する。昨日歩いて勝手を知っているので不動清水で食事をし、展望台で四方を鑑賞して気楽にBCへ向う。BC附近に人影が見えないので心配しながら下りて来るとテントに狼火場出合を行くとの置手紙があり、安心して岩小屋上でアマガイレンの練習をして待つ。

(林 武 志)

本隊一二、三〇BC入り、昼食后本谷偵察に向う。

五月四日 (小雨曇)

広河原沢ニルンゼ 町田 明、飯塚康史、

BC(六、五五)―ニルンゼ出合(九、〇〇)―F₁(九、一五)―
四〇(一F₂)―一〇、三〇(一阿弥陀岳頂上)―一三、二〇―一五、二五
(一BC)―一七、二〇)

ニルンゼ出合で林武志と中山を送り込んで、ニルンゼ最大の滝と思
われるF₁(この滝の上でニルンゼが出合う)にとりつく。滝の中央部
に不安定に掛った氷を登るしか手はない。飯塚にジツヘルを頼み、ピ
ッケルを振うが、スレードがね返る様に硬い。五m位で落口に出た
が、かなりの水量がアイスフォールの下に流れ落ちていく。右岸より
入るニルンゼは雪も殆んどなく、積雪期には見られない険悪さを示し
ている。右に折れるニルンゼは所々割れているが、F₂まで雪面が薄い
ている。二度、三度とキックステップの交代をしながら、直線的に登
れば、向風のF₂が更に高くなって迫る。二〇m、積雪期の倍になっ
ている。これさえ登れば、とファイトを燃して右岸にとり付き、ハー
ケンを打ち込むが、手ごたえがなく、簡単に岩が口を開いてしまう。
浮石が凍結していないだけ、冬よりも尚悪い。飯塚はジツヘルしなが
ら落石の危険にさらされている。一旦戻り再度試みたが、落口まで三
・四mと云う所がハンク気味で、ホールド・スタンスがなく突破出来
ない。ニルンゼからは盛んにコールがかかる。大分上の方だ。我々も
F₂は大きく巻くことにして、右岸の草付を戻り気味にトラバースして
一、ニルンゼ中向リッチに上る。はい松をこいで、岩稜になる所で再

びニルンゼにトラバースしながら下り、F₃の下に出る。F₃も積雪期の
倍もの高さになっていく。左岸よりトラバース気味に一ピッチで落口
に出る。岩は乾いているし、空も大分明るくなって来た。浮石さえな
ければ、申し分ない登攀である。F₃の上からは傾斜も緩くなり、稜線
までの最後の登りははい松になる。北側はまだまだ雪が豊富で、遙か
下に行き小屋が雪の中に見える。阿弥陀頂上に出た時、ニルンゼ隊も
南稜から同時に顔を見せた。登山者で賑わう頂上でシェルトをかぶ
って立場隊を待つ。立場隊は水量が昨夜の雨で増え、徒歩に悩まされ
たらしく、一五時一五分に着く。下降は御小屋尾根をとる。

ニルンゼ左股 林 武志、中山 博

ニルンゼ出合(九、五〇)―二股(一〇、三〇)―南稜(一三、〇
〇)―一三、一〇(一阿弥陀岳)―一三、二〇)

ニルンゼ隊と別れ狭いニルンゼに入る。出合は狭いがすぐ広くなり
二mのアイスフォールがある。ガンチリステップを切り乗り越す。中山
の身体の調子悪く天気も思わしくないので登行を躊躇するがもう少し
杯子を見ることにする。雪は適当な堅さであるのでクンケン高度をか
せける。左岸が広がり上師が半ば雪に埋った滝に出る。下二mはぼ
垂直でカッティンクして登る。傾斜はゆるくなり雪が切れ流れが現わ
れる。ホールドは不安定でしかも濡れているので巧みにバランスをと
って登る。最上部は水シズミを上げて落ちていてすぐ右岸を登る。

この滝で中山は元気をとりもどしたので登行を続ける。ニルンゼは二股

になり左股へ入る。すぐ三つに別れ左は昇爪状の岩の裏へ曲っているので上部は見えない。中央及び右はすぐ一〇m位の垂直な廻漕となり下部数mはホールドスタンスなくリスもないので中央の右岸の草付を捲いて越えることにする。アンザイレにし三〇mほど水平に不安定な草付を捲き灌木帯を二〇m登ると滝上のリッチに出る。更にやゝ下降しつゝ右へトラバースしてルンゼの細い平坦部に出る。上下ともルンゼはスベリ台状で急傾斜である。五m位登って右岸の這松帯に入る。爪が強くしかもガスで自分の位置が全くわからない。這松中で一休みしてニルンゼ隊を呼んでみる。懸場にいるらしく返事がない。しばらくすると返事がきた。安心して登り出す。這松コギで下半身ピツシヨリ濡れて南稜の四峰下に出た。三月ちよつといやだった四峯下のトラバースも何のことなく阿弥陀岳の頂上へ。頂上の石が見えたと同時に向うから登ってくる町田の姿が目に入った。全くよいタイムシタだ。無争を祝して握手、立場本谷隊を待つ。(林 武 志)

狼火場沢 福田宏二郎、米野弘躬、

BC(七、〇〇)―狼火場沢出合(八、三五)―二股(九、一〇)
九、三五)―稜線(一一、〇〇)―一、三〇)―一面岳(一四、一〇)
―菅林小屋(一五、一〇)―BC(一六、四〇)

やゝと空も明るさを増し小聲りになった所を立場本谷の田中、松田の両名と共に飛ばす。路が消える所に小屋が有り面岳よりの下降路と聞くと、沢に入ると雨もようやく止んだがガスがひどく下流から上へ上

へと流れている。一五分も進むと残雪が現れはじめたが途中無争に雪の大部分が残っている出合に着いた。一息入れて本谷隊と別れる。出合は広くゴロ口状を程しているらしい。この辺はほとんど雪にかくれており流れの音が雪の下からかすかに聞えるだけである。傾斜が急に始まりめると両岸はせばまり二股に蓄く、左股はそのまゝ、真直ぐで二〇m位の滝を目前に見せている。右股は大きく右折してすぐまた左方に伸びている。左股左岸上の岩小屋で昼食の後に右股を登る。沢はゴルジュ状を程し傾斜はいよいよ急になる。ガスもひどくキックスラップで進む。進むにしたがって所々に左右からのデブリが現われている。ゴルジュの中ほどを過ぎると傾斜も大分ゆるくなる。この辺に未るとガスが無ければ先方の両岸にはさまれた空間に奥壁が見えるはずなのである。ゴルジュを過ぎると前方は急に広がり扇状になる。本谷は右に折れゆるい傾斜で伸びており、左はスツシユの急斜面である。本谷を進むと一〇〇mぐらいで三本に別れる。見当から云えばこゝより左の方向に壁がそびえているはずなので左のルンゼに入る。傾斜は急にきつくなりキックスラップで進む。雪渓は幅二mも無く赤黒い岩の向をガスの中に消えている。ガスはひどく視界一〇m位である。こゝで動き過ぎると目標からはずれる恐れがあるので右のスツシユのリッチに取り付き上部でガスの切れるのを待つことにした。待てどもガスは切れ目も見せぬ。あきらめてそのまゝリッチを登り始めた。稜線も近いと思われる頃に急にガスが切れ目を現し我々の右前方に黒々とした岩かげがガスの中にポーと現われた。それこそ我々が待つて

いた岩壁である。下ははじめに入ったルンゼに落ち込んで若り上部は我々の地桌よりも高い約一〇〇m近い直ににされた壁である。ゆっくり見る向もなくすぐにガスが閉ざってしまったので稜線に飛び出した。そこは推現岳と西岳への尾根の頭とのコルである。壁の上部を上から見定めようと稜線を少し登って下を見るが不明なので西岳への尾根を降り始める。そこで始めてガスが晴れ狼火場沢上部の全部を見る事が出来た。例の壁はそのまゝ稜線につまいていていりではなく基部に食い込んでゐる。ルンゼが右側面を通り大きく左方に曲り込んで稜線を完全に切取ってしまったので岩壁の厚さは三、四〇m位のものらしい。そして左端の方で細い尾根で上部の稜線へ続いている。この推定が出された。地蔵さんのある西岳に着くと空は見事に晴れ目下には富士見高原が広がりボーッとかすんでいる。頂上より一〇〇mほどの地桌より小屋で囲いたコースをとる。傾斜は急でありフッシュユがひどいので尾根よりはずれて沢ぞいに降る途中二、三の滝が現われたが何んの争もなく左右の沢に逃げ無事小屋の前に出る。あまり奨められたコースではないようだ。路に出てから午前中の天気をうらみつ再度のアタックを心に約しBCに降る。BCにはまだ他のパーティは帰っていない。今日帰京の米野はそのまゝ春の日の中を立沢に向って降りた。

(米野弘躬)

立場川本谷 田中実、松田朝夫

BC(七、〇〇)―狼火場出合(八、三五)―藁滝沢出合(一〇、

〇〇)―三股(一三、〇〇)―阿弥陀、中岳コル(一四、四〇)―阿弥陀頂上(一五、一〇)―BC(一七、二〇)

両麓の低く垂れ込めた重苦しい朝、各パーティは夫々今日のルートを出て霧の中に消えて行った。鹿ノ角のガレを左手に見て、大きく屈曲した本谷を転石伝いに歩き続けて一時間余、狭いゴルジュを過ぎると左岸より狼火場沢が入る。石のゴロゴロした暗い出合で狼火場沢パーティと別れ、二人きりの本谷逆行が始まる。霧が立ち込め今にも泣き出し相な空、左岸にセメントで固めた立派な岩窟を見る。

最初の滝八mは左岸へ徒渉し倒木を使って乗り切り次の小滝の上に出る。暗いゴルジュの両岸は氷塊を残して冷気を漂わせている。二、三の小滝を過ぎると左岸より険悪な三段滝を懸けて藁滝沢が入る。本流は急迫して最後のゴルジュとなるが、徒渉の甲斐なく不安定なシルンドが行手を進んで退却を余儀なくさせた。巖狹部は二m位で大小滝五、六本を懸けているのだ。左岸苔蒸した急斜面を高巻き、南稜青輝を正面に見て昼食をとる。霧と風で寒い。更に進んで本谷一〇mの大滝の少し上で下降点を見つけ、一三m懸垂で再び本谷へ下り立つ。残雪は沢の殆んどを埋め流れの音もない。平凡な沢が続き五m滝二つを越すと、両岸は広がりやがて三つ股出合、見当をつけて真中の沢に入り、更に二股で左に入ったが上部承土の不安定なガレとなったので右へトラーバスして道松をかいて本谷へ出る。人声で稜線の真近なのを知る。広河原パーティのコールに二人は息せき切って阿弥陀頂上へ向ったが、約束の三時には十分程おくれた。(松田朝夫)

五月五日 (晴)

広河原ニルンゼ 福田宏二郎・田中 実、

ニルンゼの連中と別れてしまおうと辺りは妙に静かだ。爪先の軽い音ばかりがこの狭いルンゼを規則正しく刻んで行く。しばらくゆくと左から名にしおうニルンゼを迎えていよいよ最初の難所にさしかゝる。

積雪期は簡単に登れ、無積期は登れないであろうと云われるこのF1も現在は中途半端で緊張させられる。非常に見事なアイスフォールを形成しそれがシユルンドウの中に青く深く消えている。取付点から見下ろすと全く無気味である。昨日のステップを更に大きくけずって氷の階段を静かに登り切る。このあとルンゼはますます狭くなり傾斜を増してくる。アイゼンが欲しい堅さだ。トツプがスリッパしたらどういう具合に止めればよかろうかと思うといざ、かいやな場所である。

S字状に大きく廻りこむと向題のF2が現われる。正面は敬慮してすぐ左にトラヴァースを開始する。正規のルートならともかく雪を解かしただばかりの單付きは非常に悪い。二五mほど延びたところで、小さな白樺の木がささやかなつり革である。七mほどでリッチに出るが寒いだろうと云う訳で昼食にする。何と咽喉を遠らぬ事よ。リッチは最もやせた部分を馬乗りに越すと、再びトラヴァースでF3の下に降りてくる。F2はいずれにしてもニルンゼのガンであるが、新しいルートの発見は我々が興味を持つところである。F3は左岸寄りから落口に向ってゆく、みかけはもう一杯に見えるが、一ピッチでうってつけのルートである。このあとには急に傾斜がなくなつて広河原と云う言津と険悪さ

はこれっぽちも感じられない。人影もなくツメは長くなく後味のすっきりした登攀が何事もなかったかの杯に終わった。

思えば長い労苦と渋い至験の三シーズン、これほど冷たいルンゼも今日は我々の苦をねぎらってくれたのであろうか。(田中 実)

広河原沢ニルンゼ 町田 明、飯塚康史、松田朝夫

BC 出発(五、四〇)―滝場(七、〇〇)―七、二〇)―ニルンゼ出

合(八、〇〇)―食事(九、二〇)―九、五〇)―阿弥陀頂上(一、二、

二〇)―BC 着(一四、一五)

テント撤収(一四、四〇)―出発(一五、〇五)―立沢公園前(一六、

二〇)―バス(一七、一〇)―富士見駅着(一七、二五)―富士見発

帰京(一八、四〇)

からりと晴れ渡った空、昨日とは対称的な明るい日だ。五月とは云々朝の冷え込みは厳しく、小さな水滴がきらきら光る。河原はいて付き残雪はクラストして今日登高に緻密なテクニクを要求している。

ニルンゼ隊と別れて、ニルンゼの急な雪渓を直登する。沢は次々に広くなり、殆んど雪で埋ったオ一の氷滝、慎重にカッティングして東越す。岩肌はまばゆく光る氷のカーペットである。更にオ二の滝を直登す。ホールド、スタンス共不安定なルンゼが続く。や、左岸寄りにタリツプを求めて、徐々に高度を上げる。大きなチョックストーンを懸けた二股に出て小休止。ここより昨日の隊らしきステップが右方に消える。我々は右岸を巻いて左股に入る。上方に南稜P4が大きく頭を出す。

右岸草付を直登して更に左岸へ移る。最後の巻五匹を水際左岸を直登すると沢はモレーヌ状の広い河原となつてP4正面壁につき上げてゐる。本谷は王折してP4上部に食い込んでゐるが、我々は直進してP4下部のバンドへ這い上る。青い空の中に阿努陀頂上が待つてゐた。ニルンゼ隊と合流して直ちに眼下のBCに向つて御小屋尾根を急降下、伐株点附近より広河原へ出る。BCを急ぎ徹収して立沢への道に急ぐ。一時間一五分の急ピッチでバス停留場に着く。真赤な夕日は長い影を落して、合宿のファイナールを飾ってくれた。

(松田朝夫)

71 谷川岳 東尾根

係・田中実

参加者・田中実、笹田英次、

五月二八日 (無風快晴)

(タイム紛失)

土合からマチガ沢の出合迄は人の列、マチガ沢で朝食をとる。マチガ沢にはテントもあり人も多い。こゝで殆んどの人と別れて一ノ倉沢に向う。出合迄の道は雨の爲かぬかるみ道、一ノ倉沢に入る。こゝはマチガ沢よりは雪が多い。本谷バンドより上迄ある杯だ、ヒョントリノ滝の辺りだろうか大きなデブリがころがっている。小休止して地形を頭にいれ一ノ沢に向う。一ノ沢はまだうす暗い。空は濃く青いそし

てせまい。一ノ沢の下半はキックステップに快適だ。時々小さな落石がある。先に行くパーティがよく見える、三組位だ。沢の中はずっと雪。上半から日影になり雪も固い。左手のシンセン屋根も頭を圧する。勾配も急になりアイゼンが欲しくなる。コルを少しという所で前のパーティがステップを切つてゐる。氷な岩をたてて飛んで来るが階段が出来たのでピッチをあげる。谷がせばまつて来ると草付に逃げるパーティも出て来る。氷だけを氣をつけて前のパーティにピッタリとつく。コルからは眺めが良い。両方の沢がすみずみ迄見渡せる。小休のちコルからオキノ耳に向う。殆んど直線だ。登りは順番を待つて登る程混んでゐる。ルートは良く解る。岩と土と草付とガレと、手ごわい所をニヶ所程ザイルで結ぶ。マチガ沢にまっばりとまきれてゐる所と六ノ沢の頭附近。高度感はあるがむずかしくはない。祭に廻れるルートもある。ザイルを結んだのはそれだけあとは天気がよいのでマチガ沢の頭のフロックを眺めたり下の方のクワリード練習を眺めたりする。

一ノ倉沢二ノ沢の頭が雪どけの水でぐしゃぐしゃそこをトラバースすれば後はしめつた雪の中を直登してオキノ耳迄、こゝで昼食し帰りを土樽廻りとまめる。雪がくさつてゐるのでクワリードは出来ずいくら今日中に帰りたいからとて他の尾根では短いのでそれに決定。少し急ぐことにして早々にオキノ耳を辞す。茂倉岳附近迄は快調に行つたがだんだんいけなくなる目は廻り足はふらふら矢場の頭から下は木の根と急な下りになやまされて膝と足首の古傷がよみがえつて来た。

二、三度ころんだりしてヤットの串で線路端に出る。駅に行くとき臨時

の準備(三時三十分)があるのでほっとする。左足をひきずりながら車中の人となる。なんと下りのつらい山行だった事か。

(世田英次)

72 谷川岳 東尾根

係・田中 将利

期日・六月八日(雨)

参加者・田中将利 飯塚康史

新緑の旧道は雨にうるんでいた。一ノ倉の上部は見るべくもない。

ツェルトをかぶって一ノ沢出合で杯子を見ながら朝食を攝る。七時半
雨は止まず、東尾根を登ることにして一ノ沢に入る。三十分も登ると
雪渓は大きく切れて止むなく左岸を登り約五〇m上で雪渓に飛び下り
る。この上ではチムニー電が現れていた。アンザイレンして先客に失
礼して左の壁から乗り越す。シンセンのコルでザイルをとき、休息は
無用と見て、すぐ東尾根を登る。泥水流れる中をぐんぐん登る。ガス
で何も見えない。マチガ沢より時折ハーケンの音がした。どこを登っ
ているのかな。トマの耳直下で、昼食、ぬれて寒い。頂上に立ったの
が一〇時三〇分、爪が越後側より吹きつける。肩でリングをば、ぱり
さてこれからどこへ下ろうか。と迷ったが結局湯掛菅の湯の音に引か
れて、泥々の面黒尾根をハイカーにまじって下る。女性の尻持をつく
こそあわれ。西尾沢出合が一時、泥を洗い活し、湯掛菅まで歩く。
いつの回にか雨も止み、心ゆくまで湯に体を沈めた。(田中将利)

73 丹沢滝郷沢

係・林 武志

期日・六月二三日(晴)

参加者・林 武志、松田朝夫

寄(八、一五)―滝郷沢出合(八、五五)九、一五(―二股(九、
三五)―直谷木能滝(九、五五)一〇、〇〇)―猿嶮(一〇、四〇)
―猿嶮(一〇、〇五)―昼食(一一、三五)一二、〇五)―河原(一
二、二五)一四、〇〇)―寄(一四、二五)

出合一八mの大滝は右手ガレを登って左岸をからみ落口に下りる。
小棚二m、三段棚各三m、小棚二mを夫々水際直登し、更に堰堤二
つを越えたと広河原となって右、左股出合に着く。

左股に入って堰堤、二m滝を過ぎ次の四m滝は左岸テラスの階段登
りだが落口が一寸しびい。右岸青崩れの河原を過ぎると前面六m滝で
詰まる。水はかなり少ないが直登不能。左岸ザレクボを登り左に巻き
棚上に出る。右手より約二五m、三段滝沢を合流し、正面垂直に聳
立した一五mF―に行手を阻まる。直ちに直登に移る。鋭切ホールド
乏しく緊張を余儀なくされるが、滝中間で顕著なレッヂあり一息つく。
上部は脆岩垂直で慎重に登り落口に至る。これより棚の連続だが、
惜しいかな水流はたと絶え淋しい水なき沢の廻りとなる。四m滝二つ
を越えようと、クラック棚八mのF2を迎える。クラック突破を試みた
が狭くて登りづらいので中程より左へ切れて落口へ出る。暗いゴルジ

ユ杖を左へ折れて正面大棚一〇mの下ろだ。乾いた棚で明瞭なバンド
 四本をジクザグに落口迄四mは真直ぐに登り切る。小滝四つを過ぎて
 垂直三m、七m滝も木につかまったりして通過。次に一〇m棚F5が
 現われる。下部ホールド小さくハンク気味、クリツツに摩擦を効かせ
 て登り、四m位上部のバンドを少し左に切れ更に右手落口に向って登
 る。八mF7、九mF8、四重棚一二mF9も夫々索に直登し、上部
 アンサウンドロックの七mF10も難なく通過、緩いルンゼ状三段一五
 mのF11を登り切れればやがて沢は終了する。槍林の急傾斜を頂上目ざ
 して登り稜線に出る。左に折れて二つ目のコルより木馬道を急降下、
 傾斜の緩くなる頃昼食をとり、寄沢の広い河原に飛び出した時は未だ
 正午を少し過ぎたばかり。汗と泥にまみれた体を洗ったりして二時間
 の大休止をとり午後二時寄部谷に向う。

寄沢支流中随一として、南面才一級沢として紹介されている滝
 沢は出合大滝の堂々たる偉観に圧倒されるが、上流水なき棚の登攀に
 至り何か空虚な満されぬ感じがしないでもない。要するに我々は気負
 い込み過ぎたか。見かけ倒しの沢としておこう。(松田 朝夫)

74 湖沢合宿

係・岡谷 徹

八月九日 (晴)

本日はまだ現役合宿期向中だがわずかの休暇を利用してはるばる来
 た米野のためドーム中央稜をえらぶ。飯塚えんりよするので岡谷が相

手をする。飯塚、坂田は現役について南稜―北ホー湖沢岳―サイテン
 クラードと歩く。午後現役はテント撤収機尾までおる。明日は徳本
 越えて下山。OBは水の使の悪い上のテント場から下のテント場へと
 テントを移動。高嶺は本日休養。

滝谷ドーム中央稜 岡谷 徹、米野弘躬、

BC(七、三〇)―北穂南峰(九、〇〇)―オ三尾根T3(一〇、〇
 〇)―ドーム(一一、一五)―一、三〇)―北穂小屋(一二、〇〇)
 一二、一〇)―BC(一四、一五)

美事な青空のもとを北穂から奥穂へと回る現役と共に花の咲いてい
 る南稜を登る。昨日BCに入った米野が調子が出ないので少し遅れて
 南峰へ付く。上に立つと飛驒側は雲が多く槍が見えたり消えたりして
 いる。滝谷は静かにガスに沈んでいた。ガスの昇らない内にと現役パ
 ーティと早々に別れて縦走路を飛ばしドームの裏側を回わりオ三尾根
 の上部へと入り込む。尾根を直降して広いT3に出る。T3をオ二側、ガ
 リーを登ると目前にスッパリと切れたドーム正面壁が現われ、その向
 うにクライマーを蟻のように見せたオ二尾根が見える。この正面壁の
 右の岩稜が中央稜と呼ばれるもので我々の地点から頭上に伸びている
 のだ。この地点は正面フェーイスの中段テラスと云われている石端で
 ある。谷向のガスが動き始めたので直ちに登攀を開始した。オ一タ―
 岡谷・米野の順、三〇mサイルでアンサイレン、稜の正面側のガリ―
 杖のチムニーに取り付く、一〇mほどはスルスルとサイルが伸びたが

チムニー上部がハンクぎみなので少々手古ずる。ハーケンを打ち込みチヨクストンの上に立ち米野を待つ。そこからは直ぐにフラットなスタンスも無いフェーイスで古いハーケンが先端を少し打ち込んで残っている。その上には細いバンドが上に伸びている。岡谷そのバンドにやっと手をかけ強引に足を上げてバンドに立つ。傾斜の強いチムニー状を登りオニのチヨクストンに出る。これは岩が壁からはかれたような型のピーク（オニ尾根等からも良く目につくピーク）にはさまれたものなので両側が切れていて高層感が身にせまってくる。これよりオニ尾根より走るバンドをトラバースして岩上に出ると広い碎石のテラスに出る。それよりドームよりV状の細いクラックが頂上指して伸びて上部にてハンクしている。岡谷ハンク直下でザイル一杯になりセルフレールをして米野をジツヘルする。その地点では二人で立つ事も出来ないで米野が蓄ってトップに立ち、そこから石にバンドをトラバースしてリッジを登るとドームが目前に現われてしまった。そこから広い岩稜が一〇mほどつづいて頂上である。岡谷はハンクをそのまま直登してそこへ出た。二人共に何んとなく拍子ぬけた気持で手をにぎる。と云うのはこの辺で昼食にしていよいよヴァリアンテに向おうと話していた矢先だったからである。ルートをミスったか？。と思えどもそんなはずもなく我々のルート図が原因だと云う結論に達し、何んとなく物足りなさを感じながらも登攀完了を新ためて味いながら昼食を用いたのである。日はまだ高いが現役が今日横尾に降りるので北廻東稜をのんびりと降り荷作り中のBCに着いた。その内

に女子コーチの林も奥麓から降りて来た。明日からは〇Bだけの合宿が始まるので明日の再会を約して下山して行った。（米野 弘朝）

八月一日（晴）

林、米野、飯塚で三峯フェーイスを予定していたが林が今朝になっても来ないので一同むくれる。天候があやしくなってきたので岡谷、飯塚も出発。夕刻福田BC入り。

涸沢槍東稜 米野弘朝、坂田幸彦、高橋邦雄

BC（七、〇〇）―東稜基部（八、三〇）―涸沢槍（一、二、〇〇）
一、二、三〇）―穂高小屋（一、三、一五）―一、三、四〇）BC（一、五、三〇）

涸沢からの涸沢槍はその名のとおりに鋭くそびえているので見るからに一度はと登攀欲をそそられる。新人二名をつれてザイテンクレードへの路を進みザイテンの手前から涸沢のコルを目にかけて途中から東稜の末端へと登る。途中はガレで非常に歩きにくく丁の調子が悪くなつたので少しお花畑で休む。少時にて回復したので東稜の南支稜に駆け付く。これは草つきのもろい岩稜でしばしばキモを冷される。北支稜に合う手前で急に傾斜が急になる。高層の鉄靴がいやにスリッパを起し高橋、坂田二人とも新人なのでザイルワークの練習も合せて三〇m二本で米野、坂田、高橋のオータでアンザイルをしてワンアットタイムで登る。ニピッチ目で南北支稜の合点に出た。こゝははい松の広場

である。これより上がや々と岩の稜が続いている。これに入ると浮石もなく快適にリッジ上を登る事が出来る。上部に行くにしたがつてリッジはうすく切り立ってくる。四ピッチ目には無事頂上に続く広いリッジに出た。こゝまでは三人でたんに念にワンアットタイムを行って来たので倍近い時間が費せられてしまった。頂上を過ぎるとその先一〇mほど下を縦走路を通っているので一寸手前で昼食にする。その向に滝谷側はガスが見ている向に盛上り飛脚上げが吹き上げコルを越えて涸沢側へと流れ始めて来た。天気さえもてば米野と坂田でジマンタルムまでも足を伸ばそうと云っていたのであるが、このガスでは一寸行く気がしなくなってしまう。食後縦走路を涸沢岳を越えて標高小屋に出る。取りあえず奥穂までもと思つたが小屋の前のクサリ場の湿み林を見たらうんざりして行く気がしなくなってしまった。小屋で一息入れてガスが濃くなったザイテンをBCに向つて降つたのである。

(米野 弘 躬)

三峯フェース 関谷 徹、飯塚康史、

BC(九、四〇)―取付、昼食(一一、〇〇)―一、四〇)―頂上(一三、二〇)―一三、五〇)―一三、四〇)―一四、〇〇)―BC(一四、四〇)

前夜来る予定であつた林が午前九時になつても来ないのでコース、パーティー等が発火大変遅れてしまった。日が高く上り静かになつた涸沢を後に雪の少くなつた三、四の雪渓を急ぎ足で登る。途中ニパーティー程に出合つたが何れもアイゼンを使用するのでバケツの頼りに

はならない。取付直下に来た時上部にパーティー取付にパーティー背後にニパーティーと中々の盛況である。しばらくルートを見ながら研究し後からのパーティーに越されぬ爲に前のパーティーがまたつまつてはいたが取付を行く。「番」を確保しながら中食。ビスケットとソーセージを力に変えて待機する。いよいよルートが空いたのでアンザイレンし関谷から登り出す。取付はやゝ悪くハンク気味の岩を右寄りに登り草のついたテラスに出る。こゝでも又少々待機。此の辺より誠に岩らしくなり小さいながらホールドもスタンスも強い。右寄りに直上しているルートがハンタし壁となつている手前にて右にトラバースをする。途中のピンに、関谷のかけたカラビナがどうもはずれないので少々閉口したが所詮セカンドは落着いたものである。トラバースはちよつと高度感があるがその最後の一步の所に立派なホールドとスタンスが隠れているので思ふ程ではない。トラバースを終れば左寄りに傾斜のゆるくなつた所を登つて行くとニピッチで縦走路に出た。取付より三〇m オール起一杯で最後はいつもセルフブレイを外し五ピッチで終つた。高度感も思つたよりなく実に快適ではあつたが前後に三人づつまつていたので何となく落着かず何処をどうして登つたのやら解らぬ中に上に出てしまつたという感が強いのは本当に残念であつた。下りは三、四の雪渓をクリセードにて飛ばす。

(飯塚 康 史)

八月一日 (晴)

南稜を登りオニ尾根上部より滝谷見物ののちオニ尾根、クランク尾

根にと別れる。登はん終了後北木で合流南稜をBCへ下る。米野、高橋が下山。笹田が入山。

才三尾根 林、飯塚、坂田

BC(五、四〇)―北穂(七、二五)―C沢二股(八、一〇)―八、二〇)―T4(八、四〇)―九、二〇)―縦走路(一一、四五)―南稜上(一一、五五)―二、一五)―BC(一三、一五)

C沢左股上で福田、閑谷に別れカラガラ下る。上部は踏跡がしっかりしているが、下部は一步毎にくずれ全く気持が悪い。右股に入り二本目の赤いガリーに入る。スラア杖で右端がクラックになっっている。クラックを中程迄登り細いバンドに沿って左にトラバースしスラア左方を登る。ホールド、スタンスは確りしているがスラアであるため岩に馴れない坂田はやゝ気押しされた感じだ。T4で才4を登る途中を眺めながらザイルをつけ林、坂田、飯塚の順に出発。二〇m位の混じった径を行き、石へ浮石の多いバンドを行く。三〇m一杯でT下る下に未だ出る。これから上は面白くなく直上の四m位の岩を登るとあととはがれが狭く、石の稜線に出て一ピッチ岩登りらしいことができたが右側に径があり面白くない。中央稜へは容易に行けるが三人であるので意外に方向がかり、約束の時刻におくれるので真直ぐ縦走路へ出て北穂に向う。蓮谷側はガスが濃いが滝沢側は晴れている。北穂には既に福田、閑谷が待っていた。

X X X

笹田がBC入りしたので、昨日福田の持ってきた西瓜を食べた。

長時間冷たい水に漬けておいたので歯にしみわたり非常に美味しかった

(林 武志)

クラック尾根 福田、閑谷

北木(七、五〇)―B沢下降点(八、〇〇)―取付点(八、一〇)―八、四〇)―昼食(九、四五)―一〇、一五)―北木(一一、三〇)

ヘルメットをかぶってB沢を駆け下る。五分ほどで窓状のコルを見上げる点に達する。草付を一段上ってアンザイレン。福田トツツでシュー開始。浮石だらけの上に岩はぬれているので窓外時間を要し二ピッチで窓状コル上のテラスに立つ。才三ピッチ福田トツツでバンドを右へトラバースして約二〇mスルスルとザイルがのびて両側のきれた馬の背林のテラスに達する。才四ピッチ閑谷トツツですぐ右手に見えるクラックに。ヘルメットまでデポして巾約三〇センチのクラックに体を押し込みフリクションで六mほど登る。上部にゆくほど中はせばまり苔むしてくるがなんとか……ともぐり込むもついに首もまわらず足もまわせずともハンマーなどふりまわせないのであきらめ三mほどスリ落ちる。こゝから右側の壁に移りハーケンを打ちなんとか通過カラカラのテラスに達する。次のピッチ福田トツツで左手を直上途中より右へまわり更に直上。バランスを要する。三〇mいっばいでテラス。この上閑谷は浮石の多いリッジに出る。大きな浮石をかゝる込みながらの苦しい登攀。リッジをあきらめ三〇mいっばいでB沢側

のガリー上部にくだる。滝状の所を福田トツプで一ピッチ。ガレ場に出る。コンテイニユアスでガレ場上端に達し昼食。オニ尾根P₂に一〇数名。オニ尾根に三パーティ。すぐ近くを登っているのついで話しかける。オニ尾根もたいしたことなさそうだ。頂上もすぐだし少し簡単すぎたからこの辺で楽しもうと、安易なルートをとって左手の壁にルートをとる。一段上った所からアスミを使って左上へトラバース。

福田あっさり手をつけたもののひどく悪い。ホールド、スタンスほとんどない。二度の吊上げとハーケン連打で数mかせぐもついにハーケンをうちつくしテラスへあと一步のところであつまる。ッひも類つないでたさせよ、ハーケンやるからッ。とどなると、忘れてたッ。と福田はだしになり突破テラスに立つ。約三〇分間の悪戦苦闘。こんな所じやセカンドも乗じやない。アスミにぶらさなつてのオニ一歩から始りハーケンからハーケンへと乗り移り時にはザイルにぶらさがり懸命の腕力のほり。テラスに立つた時には福田のグツをはじめカラビナ、アスミで腰はずつしり。下のパーティより声ありピオレを置き忘れたことを知らされる。ザイルに結びつけてもらう。感謝感激。これより上は岡谷トツプ。最後の三mちょっと緊張したがハーケンを打つまでもなく通過。小屋前が出る。二人そろつた所で大急ぎ④のヘルメットをぬきみだしなみをととのえ北木頂上へ。(角 谷 徹)

八月二日 (曇夕刻にわか雨)

北尾根三、四のゴルから奥又側への下りはいささか悪い。雪が堅い

うえに下にいけばいくほど急になり最も急になった所で雪は消えてい
る。福田、岡谷のみタリセードでくだり、三峯リッジ組は下までくだ
らずにトラバースしてリッジの中段に出ることにする。登はん終了後
三、四のゴルにて合流。ぼつぼつ降りだした中をBCへとタリセード。
本日は飯塚テントキーパー。

三峯リッジ (林)

三峰奥又側リッジ 笹田、林、坂田

BC(五、四〇)―三、四ゴル(七、二五〇七、五〇)―取付(八、
〇〇)八、四〇)―三峰(一ニ、〇五〇一ニ、一五)―三、四ゴル(一
三、〇五〇一四、一〇)―BC(一四、五〇)

三、四のゴルに向つて雪渓を登る。心配された落石もなく三峰フェ
イス下でガレに入りゴルに出る。四峰側に少し登つて前稜稜面の椀子
を見る。三、四のゴルから奥又側へタリセードで下りたが末端が急傾
斜となつて切れているので福田、岡谷等と別れ我々はトラバースしてリ
ッジへ出ることにする。シュルンドからアンザイレンして出発。外傾
スラフをトラバースし、土と岩の混じた所を更に水平に行く。ニピツ
チ目岩稜のハンズ下を這つて廻り込もうとしたが失敗したので真直草
付を七m登り、細いバンドを高いホールドにつかまり背のびをしなが
らトラバースして岩稜に出る。こゝ迄は安定な場所全くななくジツヘル
している方がつらい。又余程大きい岩でも浮いているのでホールド、

スタンスにするには充分用心しなければならぬ。岩稜の石側は滑い岩を土に押込んだ称なのでやめ、一段登って左へ廻り込む。浮石の多い広いルンゼになって、その向うに主稜がある。主稜も浮石の積み重りの状態である。一応全員集結し一息入れる。ガスで東壁の連中の姿は見えないが声はよく聞える。ルンゼ上端はチムニーもあり適当に広いテラスもあり高度感もあり安心して楽しい岩登りができた。四峰で福田・岡谷の声がするので主稜の華付の階段状を急いで登り、三峰直下の壁の下に出る。壁を左に巻いて三峰上に出て福田等と連絡をとり下る。コルで残りの食事をして、落石に注意しながら各自適当なスピードで雪渓を下る。夕方から雨が降り出しNo.1は雨濁で水溜りができ明日の行動が思いやられる。

(林 武 志)

前ホ東壁(北壁、Aフェース) 福田・岡谷

三、四コル(七、五〇)―北壁取付(八、二〇)―オニテラス(九、三〇)―一〇、〇〇)―前ホ頂上(一一、二五)―三、四コル(一一、四五)

三、四のコルからは愚命のクリヒド、最も急になった所で雪は消える。インゼルの上で日次に移りつめる。ガスの去来する中を落石は連続的にやってくる。法暗い上にじめじめしていて井戸底の感がある。北壁は中央右よりから取付く。四、五〇m連登してアンザイレン。三ツ道具を半分づつ分けて福田取り付く。古ハーケンにアスミを掛けハンタ気味のチムニー通過、リッジ状の所にとびだす。岩ツバメが

落石の林にやってくる。平凡なオニピッチのあと福田六mの面白いクラックにルートをとる。アスミ使用中で中段までは索に送るが上部はハンタしている上にぬれていてしびい。オニピッチ岡谷トップ。平凡だが岩がもろい。小ハンタにつきあたる。リスなく吊上げもできず足もとにハーケンを打ち振子ぎみに左に下げオニテラス末端にでる。

ニバーテイ先着している。昼食とばかりにパンを口にしたらとたん(註)のヘルメットBフェースに消えてしまふ。北壁でセーターなんか捨ててきたのがいけなかったとボヤク。残るヘルメットはセカンド専用ということにして中央の壁にとりつく。福田つい山岳部との対抗意識で張切ったものの非常に悪い。ほんの少しのことだが残置ハーケンまで足が上らない。ザイルが出たりもどったり。じゃまものピオレをデボしてやっと通過。岡谷はセカンドの特権を乱用、腕力登りでごまかす。オニピッチ岡谷トップ。ヘルメットとアスミを交換し約六mのチムニーに入る。いささかしびいが乾いている上に浮白がないので気分がよい。残置ハーケンにランニングビレイして通過右上へバンドをたどる。映画、北壁の場面か。バンドを上までたどってはつまらない。敵に負けてなるものとハーケンをたゞ込み振子で左の壁に移る。三〇mいっばいで外傾した広いテラスの右端に達する。左端までコンティニューアス。索外悪い。オニピッチは福田トップで左側のチムニーに入る。約六m。強引なトップ振りかぶるていどに悪い。チムニーを抜けると前ホ頂上は眼前。ついに山岳部のニバーテイに追いつけなかったがまあザイルを解いてニコニコ。ガスで展望きかず

早々に北尾根に向う。三峯のくだりで福田は奥又側に、岡谷は瀧沢側にとまざれども、あいつそっかしいからとどなれど返答なし。

落ちることはあるまいかと敬意を表してコルに先着。やゝあつてゴホー。お前そそっかしいから落ちちやったんじゃねえかと思つてどなつたんだぞ。とガタガタおりてくる。三峯リッジはガスで見えないが取付附近から林達の話し声が聞えてくる。こりや大変だ助けに行かにやなどどまじめになつていつているうちに三峯直下に達しているのが見えてくる。

八月一三日 (雨)

才四尾根(林・笹田・飯塚・坂田)才一尾根(福田・岡谷)の予定だったが雨のため中止。一〇時すぎに雨が止んだので岡谷をテントキパーに残し乗換へ岩登りの練習へと向つたが再び雨となり北木沢より引返す。

八月一四日 (雨)

福田・岡谷は才一尾根を登るべく三時半にBCを出る。キリシヨンから本格的な雨と降り北木小屋に五時ついたものの、とても岩は無理。五時半に小屋を降り南稜をBCに向う。BC帰着七時。すでに笹田・林・坂田は下山。飯塚と三人残り物を整理しボロ子ヤンに見送られて一〇時に出発。雨にふるえながら横尾で昼食。ついに横尾でも森田さんに会えず福田しよんばり。上高地までマケになつてとばす。二時

五〇分上高地。三時一〇分のバスに乗るも途中土砂くずれのため歩かざれ松本には九時すぎに着く。

笹田・林・坂田

瀧沢(六、五〇)ー横尾(八、〇五)八、二〇)ー徳沢(九、二五)

ー上高地(一〇、三五)

雨が強くなつてきたので才一尾根に向つた福田・岡谷を紫しながら飯塚に後を託して出発した。雨は強くなつたり弱くなつたりする。

その雨の中を登つて来る連中が意外に多いのに驚かされた。横尾で一息入れて上高地迄とばす。徳沢より下の人通りは天気によつては全く支配されないらしくにぎやかである。入山のとぎよりも重い荷物なので肩が痛い。足の痛くなる頃上高地に着いた。既に松本行は満員なのでシャツを替替えて臨時の島々行を待つ。(林 武志)

75 谷川岳一ノ倉四ルンゼ

係・町田明

参加者・町田明、田中実、松田朝夫

期日・八月一七日 (曇)

土合(四、二五)ー一ノ倉出合(五、二〇)五、五〇)ー鳥帽子ス
ラス下(七、三〇)七、五〇)ー南稜テラス(八、三〇)ー本谷バン
ド(八、三五)九、一〇)ーF3(一二、〇〇)一二、三五)F上(一
三、三〇)ー南稜テラス(一七、二〇)ー土合(二〇、五〇)

夏山にも出掛けられなかった三人が、久し振りに足をそろえた。

マ子ガ沢は谷全体が縁に埋まり、入る人も無い。一ノ倉に向うパーティーは一〇数組、お互の胸に秘めた登攀に緊張しているのか、或は眼むいのか、言葉一つ交さず、黙々と行く。一ノ倉合合から見た鳥帽子スラスはいやに白い、ヒョククリの滝の高捲ぎで登山香がつかえ、澄マとして進まず、最終列車組に追い付かれてしまった。鳥帽子スラスの上りは、湿めっていてピプラムが快通にきかない。本谷バンドに降りる頃、早くも、滝沢下部をねらうパーティーが最悪のオーバーハンク帯をトラバースしている。我々もヘルメットを出し、支度している。と、落石ママと声がかかる。殆んど休む向もない落石である。少しでも先に行くにこしたことはない、町田、松甲、田中のオーターで登攀開始。F滝はニルンビ側に廻り込んで湖上に出る。すぐF₁であるが先行パーティーが動かないので、石岸の土のつまった凹地を直登して、F₂の上に出る。目の前のF₃は水を落している。トツスは全身水をかぶって二つ目のチヨック、ストンの兼越しを試みるが、失敗。F₃下で昼食。この時、下より避難者遺体收容の援助を依頼され、直ちにアフサイレンにてF滝上まで下降する。避難者は単独で中央壁を登攀していた者である。二〇数名の人手をもって、南表テラスまで引下し、皆備隊に引渡して、芸藝のせまったスラスを下降、下半身泥だらけになって、最終列車に向に合うよう土合に急いだ。久し振りの山行だったがだけに、諦めきれないものがあつた。

(町田 明)



三年ほど前に槍から劔、白馬から劔、針ノ木一平一劔と劔へ集中した時の話で少マ百くさくて恐縮であるが今だに語りぐさとなっている。そこで知っている人にはなつかしい話を知らない人に聴いて戴く。

その時は殆どの者にとって初めての劔沢入りだったので興奮と期待をもって到着した。三田平に幕営してガス切れ目にわずかに見えるハツ峯を眺めて曇っていたのもつかの向、翌日は一面のガスで視界もきかばこそ、兎に角何にも見えない頂上に立った夜は、あとわずかの合宿の食糧を残して全部を持ち出し盛大な夕食のあと大食漢運は全員を募集し、統制飯券の食糧を使用して夜食を作っていた。こゝまでは景気が良かったがその夜がいけない。あわれにも防水の切れた古いテントでは凡の強い劔沢の雨を無事に過せるはずはなかった。それでも一人前に張綱を締め直し溝も深くして入口を閉じ、ローソクの光でスボンの尻をつくろっていたが、あたりの暗くなってくるに従い何だかボールをおさえなくなる称なゆれ具合だ。その頃はもちろん上からポタポタ以上の雨もりである。はじめのうちは濡れない称にザック等をあちこちと動かしていたがそれもあきらめ、マケクソの煙草の煙ほ上に昇りもやらず、あほられるテントに小刻みにゆれているのをボンマリ眺めている。雨と凡は周期的に素

「山日記より」
夜の
話
小田 尚於

通しのテントを襲う。その度にボールを気にして苦笑する。

「エイ、ママヨノ」とひろげて寝る毛布がクツシヨリ。絞りもせずにそれにくるまる。いやその切ない争よ。寝返りを打ば濡れた尻や、足や、背中がビチャビチャ音をたてる。家に居れば乾いたフトンに覆られるのに、とつくづくこんな所に来た自分ごうらめしくなる。夜の更けるにつれて凡雨は強くなるばかり。この時ほど乾いたものが恋しかった事はない。普段は力サカサして嫌なカパンでさえシッポリと表面が柔らかくなっているのだから。しかるにこの雨の中、我々の三張のテントの隣りに張ってあるのは女性三人に野郎が一人の冬夫で、石油コンロをゴウゴウと燃し、賑やかな笑い声は雨も亦奈しとでも言ってるんだらうと憐みたくなる。泣き寝入りではないが、その水滴てる中でいつしか眠りに落ちた林だ。夜明け前、窓うつ嵐に夢も破れ、今日も雨、面倒だとばかり弥陀ヶ原を通って下山した。美女半の駅で乾いていたのは、ビニールで包んだほんのわずかの衣類だけだった。

雨の山行も好きな私だが、朝めしもなくに食わなかった弥陀ヶ原の退却中、ふやけたカンパンを噛りながら、雨降りも程度問題だなど、夏山合宿のみじめな最後の夜の争を、しみじみと思うのだった。

西高山岳部近況

▲104 新人歓迎会 四月二〇日(晴)

(OB) 林善、林武。(現) 田中康、岡谷興、沢野、川田、高山、
 秦、田辺、梶内、橋本章、中村恭。(新) 高橋、小川、篠原、野原、
 加藤。

▲105 奥秩父二年強化山行

田中康、岡谷興、沢野、川田、梶内、秦、高山、田辺、橋本章、

五月三日 塩山―雁坂峠(薄雲)

五月四日 雁坂峠―甲武信岳―横雪の島最低部部幕営

五月五日 国師岳―奥千丈―塩山

▲106 豊取山 五月一〇(一)日

今井、沢野、川田、高山、秦、田辺、橋本章、梶内、中村恭、高橋、

篠原、加藤、野原、小杉山、飯尾、青砥。

▲六月一日付

正部員推薦 沢野 徹(29)

▲107 塔ヶ岳集中 六月一五日

水無川本谷 田中康、駒井、秦、橋本章、原田、加藤、

源次郎沢 沢野、梶内、田辺、小川、野原、

勘七ノ沢 木原、川田、高山、高橋、篠原、

▲108 御前山(女子) 六月二二日

(OB) 笹田、(現) 植木、鈴木葉、中村恭、青砥、飯尾、

▲109A 穂高湖沢夏山合宿

(OB) 岡谷徹、飯塚、高橋邦、坂田。(現) 田中康、岡谷興、沢
 野、川田、高山、秦、田辺、梶内、橋本章、高橋範、小川、野原、
 高橋輝、小杉山、

八月四日 島々―南沢―鮎止下幕営

八月五日 鮎止―徳本峠―横尾幕営

八月六日 横尾―湖沢幕営

八月七日 午前中ⅢⅣ雪渓でクリヒード練習、午後は北穂東稜側壁

にて岩登基礎練習、編隊行動練習を行う。

八月八日

ジマンタルム飛騨尾根 岡谷徹―沢野―田中、飯塚―岡谷興、

北尾根 岡谷徹、飯塚、川田、高山、秦、田辺、橋本章、梶内

奥穂 坂田、高橋範、小川、小杉山、野原、高橋輝

八月九日

北穂奥穂 飯塚、坂田、田中康、岡谷興、沢野、秦、川田、高山、

田辺、橋本、高橋範、小川、野原、小杉山、高橋輝、

午後より徹收、横尾にてコンパ。

OBは湖沢に残留

八月一〇日

横尾―徳本峠―島々

▲109B 女子横尾合宿

(OB) 林武、(現) 鈴木、中村恭、飯尾、青砥、青藤

八月六日 上高地―横尾

八月七日 槍ヶ岳

八月八日 蝶岳―大滝山

八月九日 奥穂高岳

八月一〇日 横尾―上高地

▲八月二一日付正部員推薦

川田 秀明(30) 才一五代主将

栗 武司(31)

梶内 俊夫(32)

高山 利彦(33)

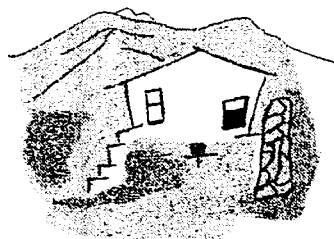
▲110 丹沢主脈縦走 九月二〇～二一日

沢野 川田、高山、栗、梶内、田辺、橋本卓、高橋範、鈴木葉、小

川、野原、小杉山、高橋輝、松原、加藤、斉藤

今期は早々に夏山計画を述べて学校側(前教育庁の指令)との間に難行に難行を重ねた。遂に部が折れて指定通り七日間と云う日数に決定したのは七月も下旬に入ってからであった。山に於ける重要な基本生活すら追いまくられて身につく前に終了する様な合宿となったが、二、三年部員の強化によって或る程度は補われた。今後は、加ふる日教的、回教的制限の中で、如何に合理的に基本技術の教育を行うかにある。地味な基本力養成にかなり合理化されている部形態を更に一步合理化

せよと云うことなのである。と云っても高校生の頭脳と体力には自ら限度がある。多くの必要事項の中から更に、何をかを捨て、何をかを捨てるべき新人の能力を試しながら、OB全ての責任に於いて検討に検討を重ねる急に迫られていると云えよう。(田中 将利)



LA MORAINÉ		1958. 4. 1 ~ 9. 30	
NO	山 行 名	月 日	備 考
1	川苔山新人歓迎会	4. 22	林春、林武(部員30名)
2	(69)ハッ岳狼火場沢	4. 22	田中将、田中実、福田
3	(70)ハッ岳立揚川周辺	{ 4. 29-5. 1	岡谷
		{ 4. 29-5. 3	林春
		{ 5. 2 - 5	林武
		{ 5. 3 - 4	米野
		{ 5. 3 - 5	町田、田中実、松田、福田、飯塚、中山
4	(71)谷川岳シンセン尾根	5. 19	笹田、田中実
5	"	"	林武
6	(72)谷川岳シンセン尾根	6. 8	田中将、飯塚
7	御 前 山	6. 26	笹田(女子部5名)
8	(73)丹沢滝森沢左股	6. 26	林武、松田
9	穂 高 溜 沢	7. 11-14	岡谷
10	後 立 縦 走	8. 6 - 9	成瀬
11	(74)穂高溜沢生活	{ 8. 4 - 12	高橋(部員22名)
		{ 4 - 14	坂田
		{ 4 - 16	岡谷、飯塚
		{ 6 - 16	林武
		{ 9 - 12	米野
		{ 10-16	福田
		{ 11-14	笹田
12	(75)谷川岳-倉沢ルンゼ	8. 17	町田、田中実、松田
13	穂 高 溜 沢	8. 17-20	川口
14	穂 高 溜 沢	9. 21-23	平沢

編集後記

登山は実践行爲の世界で、表現の世界ではない。と云う訳でもなからうがレイアウトは捨て印刷屋任せ、編集者の仕事といふは唯会員のシリをたゞいて原稿を集めるだけではない。会報の出来るはずがない。若し、会報を發行するといふ事が、会員の人格及び教養形成に役立つと云う事ならぬなら、貪しい財政をやりくりして会報など出す必要はない。だが、言う迄もなく、オ三吉の介在しない登山という入ホーンにあつては、山行後に報告を書くといふ事は登山者の当然の義務とされている。自己表現といふ抵抗を通過する事によつて自らの行爲を再確認する事、会の正しい未来のために、正しい過去を蔑してゆく事がどうしても必要なのである。会員は会報のもつ内部的、対外的な意義をよく認識し、価値ある登山行爲をより敏速に、且つ正確に報告し、お互いに真剣に勉強していく事を怠れないでほしい。

(松田朝夫)

富士山頂では早くも二山の積雪と報道されている。よく晴れた朝、駅の陸橋から頭を白くした富士が眺められる。その雪線が次々に下ってくるのが分る。西朋才六年夏冬山も明神東面及び遠見尾根と決定し、徐々に準備が進められている。この一年間の山行の総決算ともいふべき冬山はもうすぐだ。各自積極的な意欲を示してもらいたい。

◆ ◆ ◆
今回の、山日記より、は、遠く北海道に行ってしまった小田尚於君に待たせてもらつた。北海道に戻つてから、高尾山の林な山も登つていないという彼であるが、その内北海道の山の山行記録が送られて来るのを期待している。

(町田明)

西朋報告 一五三

昭和三年一月一〇日発行

都立西高山岳部OB会

西朋登高会

事務所 東京都中野区大和田町一八〇田中方

TEL (38) 〇八七五

印刷所 東京都世田谷区上馬町二ノ三

鶴見孔版社

(42) 八三八〇